第六章　形容詞

〔一〕活用の成立

形容詞は用言の一種で、叙述の品詞であることに於て類を同じくしてゐる。そのあらはす概念から云へば極めて近いものもあるが、一が事物の屬性を動的に說明し、他は靜的に說明することに於て、その間に本質上差別を認めることが出來る。「澄む」は動詞であり、「淸し」は形容詞である。「富む」は動詞であり、「貧し」は形容詞である。これを形態の上から見れば、動詞は五十音圖の同行に活用するに對して、形容詞はカ行とサ行とに涉つて活用してゐる。富樫廣蔭が形容詞を稱けて音雜詞と云つたのも、この形態上の特徵から來てゐる。舊時代の學者が兩者を區別した最初の着眼點は、形態上の特徵に在つたことは爭はれない。現代の口語に於ては、形容詞は、

よ‖　く　い　けれ　　よろし‖　く　い　けれ

と活用し、すべてに亘つて、活用が同一であるが、古代語に於ては、

よく　よし　よき　よけれ　　よろしく　よろし　よろしき　よろしけれ

と活用し、久活用と志久活用の二種があり、語尾を「く・し・き・けれ」「しく・し・しけれ」と見る人は接尾語の「み」「さ」等を伴つて名詞となる場合、久活用では語幹「よ」につき、志久活用では語尾を加へた「よろし」を語幹と見做すと説明し、語尾を兩者共に、「く・し・き・けれ」と見る人は、活用を説くに、志久活用に於ては、終止形は語幹をそのまゝ使ふものと説明してゐる。

こゝに於て問題となるのは、志久活用の「し」が語尾であるか、語幹であるかと云ふことである。權田直助は「形狀言八衢」に於て、志久活の「し」を語幹に屬するものとし、形容詞活用の一に歸することを論じた。その大要は、

（一）「淺さ」「淺み」「淺げ」、「嬉しさ」「嬉しみ」「嬉しげ」の如く、「あさ」「うれし」は本言卽ち語幹であるから、「さ」「み」「げ」につくとき、志久活用では「し」と共に附く。

（二）名詞につく場合、久活用では淺瀨、深瀨の如く「し」を伴はぬのに、志久活用では細女（クハシメ）、空烟（ムナシケブリ）の如く「し」を伴ふから、「くはし」「むなし」が語幹である。

（三）終止言を「嬉し」といひ、「嬉しし」といはないのは、同音が重なるのを嫌つて、一つの「し」を省いたもので、口語で「嬉しい」といふのは、「嬉しし」の音便である。「淺し」といふに對して「嬉しし」と云

ふ事のあつたことが分る。

（四）凡て活用語のはたらきは何れも一音である。然るに形狀言のみが「しく」「しき」の如く二音のはたらきたるべき筈はない。

と云ふのである。然し氏のいふやうに、空烟（ムナシ）といふのもあり、又、

いせのうみの渚によするうつせ貝むなしたのみに世をつくしつゝ（古今六帖）

のやうに「むなし」から熟語になることは確かにあるが、

おほろかに心おもひてむなごともおやの名立つな（萬二〇）

むな車にいをしほつみてもて來たり（宇津保）

月夜に空ぐるまありきたる（枕）

鷹飼のまだもこなくに繋犬のはなれていかむなくるまつほど（拾遺、物名むなぐるま）

など、「むな」から熟語になる例も少くない。「戀ひし」「厭はし」「急がし」など「戀ひ」「厭は」「急が」は動詞の未然形である。「未だし」「甚だし」の「未だ」「甚だ」は副詞である。「かなし」は感動助詞の「かな」と同源のものを語幹として、それに「し」のついたものである。「大人し」「男々し」「女々し」等の「し」が語幹に屬しないことといふまでもない。これによつても、志久活用の「し」が久活用の「し」と同じく語尾であることを思はしめるものがある。然らば、志久活用の形

容詞が、語尾の「し」と共に、「み」「さ」「げ」等の接尾語に接し、又は名詞と熟語になるのに、久活用の形容詞が「し」なくして、接尾語と接し名詞と熟語になるのは何故であるか。

これは形容詞にも發達の前後新古の差別があつたと考へなければならぬだらう。志久活用は久活用よりも新しいもので、久活用が既に「く・し・き」の語尾を具へて活動してゐた時、志久活用はたゞ、語幹に語尾の「し」がつき、唯この一個の形で、或は終止形にも用ひ、或は連體形にも用ひて、或時期を經過したことがあつたかも知れない。「遠々し越の國」など、「遠々しき」といふべきを終止形と同形なのは、この形のみで活動した名殘を示してゐるのである。助動詞はもと獨立の用言であつたに違ひないが、それには「じ」の如き「らし」の如き活用のないものがある。これも形容詞の形を想はしめる。この段階が進むと、「く」とか「き」とかいふ語尾も生じ、中には不完全な發達のまゝでとゞまつたものも少くない。「すこし」といふ語は、「小」「少」「微」等の古訓點に見えるところからも、「し・く・しき」と活用したことが察せられるし、新撰字鏡に倘小臭須古志支奈留とあるにても活用してゐたことが分るが、古典にはたゞ「すこし」とのみ用ひて、「すこしき」「すこしく」といふ形は見えてゐない。普通、副詞形として用言を修飾するとき、

女みこすこしすぐし給へる(源氏桐壺)
すこし見ばや(同帚木)
すこし物の心を思ひしる(同夕顔)

と用ひ、「は」「も」「つゝ」に接するときも、

すこしは見せん(源帚木)
すこしづゝ語り申せ(同帚木)
色はすこしもあせずぞありける(貫之集)

などみな一様に、たゞ「すこし」といふ形であらはれてゐる。「けだし、けだしく」「但し」「もし、もしく」等の形は、この發達の初期の俤を傳へてゐるものであらう。さらば如何にして遲く發達して、しばらく終止形のみを持つてゐた形容詞が、「く」とか「き」とかの語尾を取つたかと云へば、それは或時期に於て、他の多くの「く・し・き」の語尾を整備してゐた久活用の形容詞に同化され統一されたもので、語幹に「し」語尾のついた形が第二次の語幹となり、「よろしく」「よろしき」といふやうになる。ただ終止形の「よろし」だけは、まへから存在してゐたから、そのまゝ用ひられたものであらう。權田直助が口語に「嬉しい」と云ふのを、「嬉しし」の音便と說

いたのは誤解である。連體形が終止形を同化したことは、動詞の條にのべたやうに、院政鎌倉時代以後の用言・助動詞一般に通ずる現象で、連體形の「き」が音便で「嬉しい」となつたことは爭ふことができない。小田淸雄翁が皇典講究所講演で、

秋深み夜風烈ししうべしこそ四方の里人衣うつなれ（永長二年東谷歌合）

家苞にさのみな折りそ櫻花山の思はむこともやさしし（基俊集）

何ものも常に見るにはいとはししいつもあかぬは粥と大乘（無住雜談集）

等の歌を引いて、語學始まつて以來の大發見であると賞揚されたのは最眉の引倒しで、むしろ「嬉しい」といふ口頭語の形が出來た後、その影響で鎌倉時代以後文語の上に「しし」があらはれるやうになつたものである。

見苦シシトク〳〵罷出ヨト云（平家延慶本）

祇王にも劣らず、歌の音のよさよ、美しし〳〵と嘆られたり（源平盛衰記）

メテタキタカラニテハ侍レトモクチヲシシ、（康賴自筆本寶物集）

笠の內、あやししと見いれ立のけば（曾我物語）

云出セバハヅカシシ又浦山シサニ手向ヲスルニテ候（三體絕句三）

泣くはわれ、なみだのぬしは、かなししぞ（閑吟集）

世の聞えも恐ろしとあつて、急ぎ高雄へ送り奉られた（天草本平家）

等かゝる形は、皆新しいものばかり見える。要するに、歴史的にいふならば、久活用の「し」も志久活用の「し」も語尾たる點に於ては別のものでない。

そも〳〵活用語尾を伴はない語幹そのものが、形容詞のもつとも原始的の形である。

あなおもしろ布當の原、いとたふと大宮どころ（萬六）

あなたふとけふのたふとさよ（催馬樂）

あなたのみがた人の心は（伊勢）

あなうたてこの方のたをやかならましがはとみゆかし（源氏帚木）

あな心どと思いて（源氏胡蝶）

のやうに、語幹そのまゝで文の終止を成すことがある。これがその古形の一用法である。今日の口語でも、

あいた　　おゝあつ

といふ言ひ方は殘つてゐる。又副詞法に用ひて、

いたなかば　　高光る　　宮柱太知り

としたのもある。又熟語にも用ひて、

ながひく　遠白し

と使つてゐる。又後にはこの語幹を重複して、

ながく　ひさく

など副詞を造り出すに至つた。古くは助動詞に接續して、

今うたばよらし(記)

など用ひた例もある。形容詞の「し」の語源は分らない。又その發達した上からいへば、形容詞の語尾はカ行とサ行とに跨つてゐるが、その理由も定説はない。上田博士(註一)は[ch]といふやうな語尾が出來て、分化したものと論ぜられた。金澤庄三郎氏(註二)は左變動詞の「爲(ス)」であるといはれる。

加行に活いた形容詞語尾は、萬葉集を見ると、

まさかしよかば(萬一四)
かくだにも國の遠かば(萬一四)

といふ「か」といふ形がある。又、

速けむ人しわがもこに來む(記)
わかれなばうら悲しけむ(萬一五)
しましくもさぶしけめやも君まさずして(萬五)

「けむ」「けめ」といふ形がある。又、

わが戀やまず本の繁けば(萬一〇)

玉桙の道の遠けば(萬一七)

梯立の倉梯山は嶮しけど(記)

玉きはるいのち惜しけど(萬一七)

「けば」「けど」といふ形がある。この種の語形は、まだその上に職能の分擔に關して、一定のきまりを充分に發達させてゐない。

しが無けばたれか掛けむよあたら黑繩(紀)

戀しけば來ませわが夫子(萬一四)

の如きは「けば」を未然形に用ひてゐる例である。否定の助動詞がついた「けなく」といふ形もある。

妹にこひつゝすべ無けなくに(萬一五)

嘆く空やすけなくに(萬一七)

又未來の助動詞についた「けまく」といふ例もある。

見ずかなりなむ戀ひしけまくに(萬九)

これらの形をカリ活用の形容動詞の約されたもの、又轉じたものとする說もあるが、實際に於て古く「かば」はあるが「からば」はない。「からむ」は萬葉集に唯一箇の例があるだけである。又已然形の「かれ」も萬葉集に一つの例があるが、「ば」「ど」「ども」に接するには常に「けれ」もしくは「け」を用ひてゐる。これを以て見ると、カリ活用の形容動詞の方が新しいもので、前記の形は形容動詞に似た性質をもつ一種の形容詞といふべきである。

東歌には次の如きものもある。

心にのりてこゝばかなしけ
悲しけ兒らに
なやましけ人妻かもよ

今日、九州方言の形容詞には「無か」とか「よか」とか種々の職能に於て用ひられてゐる。新井白石も東雅の總論に、

太古の語には善をばヒといひけり。ヒといふ言葉轉じてフといひ亦轉じてヨといひけり。そのヨといふ言また詞の助をかりてヨシといひしに、其詞亦轉じて今の如きは、中土東西南北の方言によつてヨシといひヨキといひ、ヨカといひヨクといひ、またヨフなどともいふ。其音の輕重淸濁、呼ぶ事の開合緩急また各相わかれたり

と云つてゐるが、東歌のは東國の古い方言的形式であらう。とにかくカ行に活用する形容詞の語尾が「く」や「き」の外にもあつたことが分る。畢竟「く」や「き」は之と同じ種類に屬するものに違ひない。又後世の形容詞とちがつて、これらの形容詞活用は動詞に似た法を具へ、助動詞にも連るものがあるから、動詞活用との問題も起つてくる。學者の間にしば〳〵動詞と形容詞との關係が論ぜられてゐるが、余は半ばは動詞との關係を考へ、半ばは別方向に於ける形容詞語尾の發達を考へてゐる。言ひかへれば、カ行語尾に於て動詞と同方向の發達を考へるが、サ行語尾並に接尾語の「さ」「み」等につく形に於て、形容詞獨自の發達を考へる。動詞と形容詞とは、そのあらはす觀念からいつて類似したものである。同じ事物の屬性觀念を時として動的に說明すれば、動詞になり、時として靜的に說明すれば形容詞となる。わが國語と同一系統の琉球語には、動詞と形容詞とは形態上の區別がない。わが國語の形容詞にも、古くは動詞の形態に近いものがあつたと考へる。しかし靜的に屬性を說明する形容詞と、動的に屬性を說明する動詞とが、言語の發達するに伴うて自ら別々の品詞として分化して行くことは考へることが出來る。そこに「し」といふ語尾が形容詞特有の語形として屬性の靜的說明にあたる品詞の語尾となり、同時にカ行に活用した語尾の或ものをとり入れて一種の活用體系を成し、屬性の動的說

明にあたる品詞の活用體系とは別々な方向を取つて發達して來たと考へることが出來る。或は「し」は係屬關係を確めるものとして、高山・赤土などの「高」「赤」等について來たもので、「天つ風」「向つ峯」等の「つ」と初はあまり遠いものでなかつたかも知れない。形容詞の語幹そのものは名詞と區別できない。「築く」「掘る」から、「つか」(塚)「ほら」(洞)が出ると同樣に、「明く」「暮る」から「あか」(赤)「くら」(暗)が出て、後には一は名詞として發達し、一は形容詞として發達してゐる。連體形の用法に形式素を加へて活動を圓滑にするを得た形容詞は漸く發達せんとしてゐた股長(ももなが)・根白(ねじろ)等の叙述形式の場合をも助けて下にも附くことになり、こゝにさきに發達してゐた動詞的の形容詞活用形式と結び付く端緒をひらいた。

別の活用體系が解體して、そのうちの或ものが組合されて職能を分擔し、他の活用體系を形作ることはその例が多い。「靜かな」「活潑な」と「靜かだ」「活潑だ」とは、明かに別の語類であつたものだが、今日の口語では一方は連體形を一方は終止形をつとめて、準形容詞の體系を形作つてゐるのと同樣である。要するに文獻以前に遡ると、形容詞には動詞に似たものもあり、奈良朝時代にその痕跡をとゞめてゐるが、いつか亡びてその活用形のあるものが新しく生じた「し」語尾と一緒になり、後の形容詞語尾の起源を成した。これが今日の久活用で、それについ

で志久活用を生じたものであらう。琉球語に「し」語尾を持つてゐないと云ふことは、「し」語尾の新しく發生したものであることを想像せしめるものがある。「遠い」といふ形容詞について琉球語と比較して見ると、わが國語では形容詞の語幹 tō 副詞形 tōku に對して琉球語 tū, tūku 又わが「遠さ」に對して tūsa、遠みに對して tūsam もほゞ似てゐるが、終止形・連體形に至ると tūsang tūsaru となつて、動詞と同じ形態を發達させ、わが「遠し」「遠き」の如き形は持つてゐないことに於て大に趣を異にしてゐる。それ故に、わが國語の形容詞は比較的新しい時代に、一種特別な形態を發達させたわが國語特有の語法的範疇と見るべきであらう。

〔二〕活用形の變遷

奈良朝時代には、彼の「く・し・き」の語尾とちがつて、「か」とか「け」とか活用するものがあることを述べた。これは一時代まへに活動したものゝ殘存にすぎないことは、それがこの時代の文獻にその例が限られて居り、殊に「け」を終止に用ひたり、連體に用ひたりしたものゝ多數が東歌にのみ限られてゐることからも想像せられる。このほかに、この時代の形容詞に特有の語法としては、

妹に逢はずあらばすべ無み岩根踏む生駒の山を越えてぞあが來る（萬一五）

そを見れば心を痛み、みどり兒の乳乞ふが如く（萬一八）

の如き形のあることである。このごろはこれをマ行四段の動詞の連用形と說く人が多いやうであるが、やはり普通の說のやうに、形容詞語幹に接尾語の「み」の添はつたものゝやうである。かゝる用法としてあらはれてゐるものゝうちには、「逢ふを無み」「日を多み」の「無み」「多み」の如く四段に活いた實例のないものもある。

又奈良朝時代の普通の形容詞は、後世と同じく久活用・志久活用であるが、そのうちには尙發達の不完全であつた時代の俤をのこしてゐると思はしめる用法が少くない。

うるはしとさ寢しさねてば（記）

のごときは名詞法に違ひない。

香具山は畝傍ををしと耳梨と相諍ひき（萬一）

これも「畝傍、をゝしきもの」といふ「をゝし」が、名詞法で畝傍と同格になつてゐるものとして、始めて、從來のこの歌に對する疑問がとける。風土記に三山相鬪とあり、香具山が畝傍及び耳梨と戰つたのであらう。「と」は並列の助詞である。

連體形として用ひたものは擧げるまでもなからう。枕詞となつてゐる次の如きものは、この種のものゝ遺形である。

あをによし奈良を過ぎ(記)

花ぐはし櫻のめで(紀)

形容詞が語幹のみで活動した時代のあとには、この種のわづかに「し」といふ語尾のみを持つてゐる形が、終止形としても連體形としても無差別に用ひられた時代があつたに違ひない。ここに擧げた外、仔細に研究したならば、副詞形として用ひられたものもあるらしい。

「く」及び「き」の語尾が分化してからは、「き」は連體形に用ひられて、「こそ」の係に對しては、この形で結んだ。この點が特に平安朝の形容詞と比較して、奈良朝時代の形容詞のもつとも著しい特色であらう

鮎こそは島邊も善き(紀)

己が妻こそ常めづらしき(萬一一)

野を廣み、草こそ繁き(萬一七)

この形が出來ないまへはやはり「こそ」の結びには「し」を以て結んでゐた例がある。

子ろが襲衣の有ろこそ良しも(萬一四)

久活用・志久活用に、已然形の「けれ」「しけれ」の發達不完全なのも、奈良朝時代の言語が、平安朝のものと違ふところである。奈良朝時代に於ける已然形は、たゞ「ば」といふ助詞に接する場合にのみあらはれてゐる。

おのが身しいたはしければ(萬五)
わかければ道行き知らじ(萬五)
かへしやる使なければ(萬一五)
あが片戀のしげければかも(萬一七)

などは見えるが、「こそ」の結びに用ひられたこともなく、又「ど」「ども」に接する場合には、

畝傍山木立薄けど(紀)
あをによし奈良の大路は行きよけど(萬一五)
梅の花香をかぐはしみ遠けども(萬二〇)

のやうな「けど」はあつても「けれど」はない。

「けれ」はカリ活用形容動詞の「かれ」の轉じたといふ說がある。黑澤翁滿を始めとして草野淸民氏に至るまで形容詞の活用中からこの活用を省いた理由はそこに在る。その正しくないこと

は前に述べた通り、「かれ」の發達が「けれ」より遲れてゐることから考へられる。動詞活用に類推して已然形の「け」が「けれ」となつたもので、「かれ」が「けれ」と轉じ、又約つて「け」となつたのではない。

平安朝時代になつて音韻變化の爲に形容詞の語形に著しい變化が起つた。それはイ音便もしくはウ音便である。

イ音便は連體形にあらはれてゐる。

にくいことを引き出でむぞあやしき(紫式部日記)

よしないことはきこえでといへば(落窪)

さすがに若い人にひかれて(更級)

あはつけい樣に世人はもどくなりしかど(源氏竹川)

顏にはべにしろいものをつけたらんやうなり(榮花)

それをだに苦しいことにこそ思されためれ(源氏胡蝶)

今日の口語の連體形は、皆この形の繼續であるが、文語には「かな」といふ助詞に續く場合にのみ限つて現れる。

噫悲しいかな

ウ音便は連用形にあらはれたものである。

雪たかう降る日（宇津保）

いみじうみぞれ降る夜（源氏帚木）

今日の關西方言はこの形を傳へてゐる。それ故に、この形は東西で慣習を異にしてゐる。

（東）赤く　美しく

（西）赤う　美しう

たゞ例外として東京語でも、「ございます」を附けるときには、この音便化してゐる連用形を用ひて、「おはやうございます」「堅うございます」など云ふ。しかもこれも、「ございます」をともなつた一種の慣用語のごとき場合のことで、「ございました」とか「ございません」とかなつたり、又、殊にその間に助詞を挾む場合には、この音便形は使はないこともある。

背はあまり高くございません

おいしくもございません

ウ音便はもと〳〵關東方言には無いのであつて、例外として「ございます」につゞく時にのみ

この現象のあるのは、全く關西方言の混じたものである。丁寧な言葉づかひに古く關西方言を使つた名殘とおもはれる。「ございます」につづく時でも、連結する形の多少の變化によつてウ音便にならないのは、その故であらう。

イ音便は平安朝には連體形に限られたが、鎌倉時代には名詞法にもこの形を生じて、

鬢鬚ノ黑ハ、如何ニト宣ヘハ（平家、七）

のごときもあらはれ、室町時代に一般に連體形が終止形を同化するに及んで、終止形としても現れるに至つた。

尺三千トセラレタハ文字ガツマリテ聯句ナンドノヤウデワルイ（中華若木詩抄上）

日影ヲ見タト云フハ注ガナイ（蒙求抄三）

少々仰下シタ此僧只者テハ無イ（碧巖抄八）

馬大師推過シテ人ニ讓タモ好イ（同八）

これが今日も終止形として用ひられる形である。それ故に、上古からの形を今日に傳へてゐるものは、「く」と「けれ」だけで、それも「けれ」が「ば」に接する時の、

よければ　　正しければ

はもとの形であるが、「ども」に接するときは、終止連體形に「けれど」「けれども」を附けて、

よいけれど　正しいけれども

とつかふ。この新しい形は、江戸時代には、

これ〳〵香を嗅ぐ花を挿すなどの詞は古いけれど（浮世床上）

耳できくなら香を聞くといふが能いけれど（同）

など普通にあるが、室町時代には殆どなかつたと云つてよい。

（註一）夢覺テ坐スルコト久キケレトモサキニ久クイネタ程ニ其枕痕ガホウニツイテ不消ソ（四河入海）

はたしかにその萌芽であるが、まだ普通は已然形をもとのまゝ用ひて、

羅漢果ヲ證ス事ハヤスケレトモ（桃源抄、一）

日本ニコソ少ケレトモ（同、三）

多ケレトモ、チツトモ不怠ソ（同三）

ウツクシサハ、ウツクシケレトモ、骨格輕キソ也（錦繡抄三）

本意テハナケレトモ、セメテ詩ヲ七千首ハカリ作ツテ（同）

詞スクナケレトモ、理カタヾシク、ヨウキコヘタゾ（蒙求抄四）

倫侯テ爵ハヒキケレトモ、封邑ノアルモコソアルラウソ（史記抄、三二ウ）

のやうなものばかりである。

終止連體形に「けれど」「けれども」をつける形は、用言の已然形のかはりにも用ひられるやうになつた新しい習慣で、一見形容詞の已然形そのものゝ變化のやうであるが、室町時代には用言について現れるよりもむしろ、「まいけれども」「ぬけれども」「うけれども」など、助動詞について現れてゐることは、動詞の項に述べた。こゝに於て、「けれども」の起源が分らないものになるが、その一種に

終になきませなんだけれども（狂言鶏立の江）

と云ふのがあり、「たけれ」といふ例は鎌倉時代にすでに

山林流浪ノ行者トモ成候ハヤト申サセオワシマシタケレハ（平家延慶本）

と見えてゐる。これが頗る「けれども」の由來も想はしめるものである。「けり」は室町時代には既に過去の意味を失ひ、

但シ通鑑ハアマリ繁多ナホトニ節要シテセウトハシ思タケルカソ（史記抄三）

坡カ石鼓歌ニハ此語ヲ取タケルソ（同、四）

トコナケル沙彌ヤ在家ノ者ナントヲ師ノ方カラ大德ト云事ハアルマイソ（桃源抄三）

等、「たける」「なける」などにもあらはれて居るが、「たけれ」と共にいづれも「たり」「なり」などの連用形について、促音便になつたものから出た。今日に於けるこの種のものゝ遺形である「たつけ」にも、吾々は「け」には單に感動的價値しか與へてゐない。このやうな意味になつた「たけれども」の場合に、「た」が一般に終止形に用ひられるやうになると、「けれども」が終止形について既定の條件を示すものと云ふ意識を生ずるだらう。その結果他の助動詞にも類推して、まづ「まいけれども」「ぬけれども」の如きものを生じ、遂には用言にまで及ぼして近代語に於ける習慣を馴致したと解釋して、なほ後のよい考を待たう。

つぎに形容詞の各活用形の用法の變遷を見よう。

一　未然形　この未然形は、

したばふる心しなくば今日もへめやも(萬一八)

ことしげくともたえむと思ふな(古今)

かくおぞましくば、いみじき契深くとも、絶えてまた見じ(源氏帚木)

など、「ば」「とも」を附けて、まだ成立たない條件を假定するに用ひる形は、今日も行はれてはゐるが、次第に用ひられなくなる傾を持つてゐる。又この形の「ば」に接續するものは、或時

代には「は」がワとなつたことがある。ロードリゲーズの日本語典に「なくんば」「ないならば」と並べて、

なくわ naqua

を擧げてゐるのは、明かにその發音を示してゐるが、天草本の平家物語又伊曾保物語等にも、

命惜しくば助けうぞ(天草本平家)

清盛入道御許しなくば、賴朝いかでか生きて(同)

志が淺くは、何故にこれまでは參らうぞ(天草本伊曾保)

などいづれも、「わ」と發音してゐる。同時にロードリゲーズが「よいならば」と擧げてゐるのは、既に今日の吾々がつかふやうな形が當時行はれてゐたことを示すものである。江戸時代には、「なら」となつた。

ハア、まアだ安いなら三百五十で(膝栗毛四下)

「とも」を用ひて假定をあらはす形も尙あるが、一般に文語に引かれて殘つてゐる形である。

二　連用形　この形は、

はまなみはいやしく〳〵に高くよすれど(萬二〇)

かくながくおはしますたぐひもおはしけるものを（源氏乙女）

のごとく、用言を修飾する場合につかふことは、今と全く同じであり、この形のうへに平安朝に起つた次の音便、

世にながうありておもふさまに見え奉らむと思ふぞ（源氏紅葉賀）

のごとき形も、關西方言では今日も行はれてゐる普通の連用形である。江戸時代も同じ。その例。

いしこらしう江戸子ぢや何たら角たらいふても（浮世風呂）

つぎに、

一すぢはおもしろく、二すぢはかなしく、あはれなることは初よりはすぐれたり（宇津保）

のやうな中止形としての用法がある。これも、

雪のやうにつめたくはなく、又日にてらされてもとけません（國定讀本）

など、今日用ひられることがあるが、殆どすべて記載語で、口頭語とは云はれない。

「つ」の中止形「て」が之を補うてゐることは、よほど久しいものである。

おれも年が老いたから記憶が惡くて、根が薄くなつたから（浮世床初上）

吸物ぢや無うて轉熬ぢやさかい、鹽が辛うて、トトやくたいぢや（浮世風呂四中）

形容詞の連用形に「あり」の結びついたものが、形容動詞と稱せられるものゝ一種で、この形となつて、はじめて種々の助動詞に接續し、各種の叙述の目的を全うすることが出來る。それ故に、

これにつけても憎み給ふ人多かり（源氏桐壺）

うれはしき御心ちには、ものうかる音にのみ聞し召しなさる（增鏡）

の如き終止形・連體形の如き、普通の形容詞で十分なものは、出來ても後には用ひられなくなつた。

三　終止形と連體形　連體形が終止形を同化すると共に、終止形は亡びて、「い」語尾となり、もとの終止形をそのまゝ今日に留めてゐるものは、名詞に轉用した

からし（芥子）　すし（鮨）　おもし（重鎭）　あかし（證明）　仲よし　骨なし

或は人名として用ひられる

やすし　たかし　あつし

等のもの、又は助詞の助をかりて用言の修飾をなす

相手なしにはなす　仕方なしに歸つた

の如きものに過ぎない。このほかには、

これはされば君の御誠でもなし、これは(天草本平家)

さりながら少將は慰まるゝ事もなし、夜晝たゞ父成親卿のことのみを歎かれた(同)

の如き、今日まで引續いてゐる。事實を並列する場合に、

暗さは暗し、しかく入道の孫とも知らず(天草本平家)

といふのも、今日尙次の如く殘つてゐる。

暗さは暗し道はなし(中略)なだれをうつて落ちました(國定讀本)

連體形は、

白き袷に薄色のなよゝかなるを重ねて(源氏夕顏)

のやうに體言を修飾する場合、

隨分によろしきも多かりと見給ふれど(源氏帚木)

のやうに體言に準ずる場合、又は、

日の影にしたがひてかたぶくらむぞ、なべての草木の心とも覺えでをかしき(枕)

の如く、「ぞ」「なむ」「や」「か」等の係の助詞に應じて文を終止するに用ふるのが、中古以前の主な用法であつたが、今日は體言を修飾する場合は、イ音便の形を用ひ、體言に準ずる場合は、それに助詞「の」を伴ふ。その變遷のあとを見ると、室町時代には、

その儀ならば、老いた、若い、二千あまりはあらうず(天草本平家)

古ルイ衣ヲバ捨ラレイト云テ新シイヲトラスルゾ(蒙求抄七)

といひ、江戸時代にも、

扨爰な女中は幼いを連れ何方へござる(成田山分身不動)

のやうに單獨に用ひて、「の」を伴はないのは、もとの形の俤をとゞめてゐるのである。

「ぞ」「なむ」「や」「か」と連體形との呼應は、終止連體同形となると共に亡びて、係結の意識は失はれた。

四　已然形　この形は「ば」をつけて已に成立つた條件又は條件の成立つたものと假定する場合につかひ、「ど」「ども」を附けて已に成立つた條件をあらはすにつかふ形であつた。

日のあしければ、ゐざるほどにぞ、今日廿日あまりへぬる(土佐)

いやしけれどもをかしけれ(枕)

現代の口語では、

面白ければ見よう

嚴しければ怨まれる

の如く、まだ成立たない條件を假定し、もしくは條件の成立つたものと假定する場合、すべて假定に用ふるから、今日では假定形と稱すべきことは動詞の場合と同然である。「ば」「ども」を附けて成立つた條件をあらはす用ひ方は、尙室町時代に、

平生公トハ、氣味カ同ケレハ、此豆粥ヲクレタト看ンソ（山谷詩抄一三）

筆ヲ手ニスルコトモナケレバ硯ニ塵ガ生ズルゾ（中華若木詩抄上）

やゝあつてさてもあらうずることでなければ少將袖を顏におしあてゝなく〳〵罷出でられた（天草本平家）

の如きものもあるが、動詞と同じく、

サレドモ用フルモノナイホドニツイショウガ無用也（中華若木詩抄上ノ一）

コヽチアシイホトニ、ナントテマリ今度ハ何ソシカトシタ事ヲ見出テ云ワウト思テ（百丈清規兩序章）

サテ如レ此往來ガ多キ故ニ（三體詩法抄三ノ二）

月ノカゲガ低キホドニ城郭ノ影ガアルソ（三體家法三ノ三）

才能ナキニヨツテ功名ヲナサヌソ（中華若木詩抄上）

江水カマシテ浪ガ高キ間（三體ノ三ノ二）

樓ガヒキケレバ物ニサヘラレテ思フヤウニナキカ樓ガ一ダン高キホトニ月ニカヽル者ガナイゾ（同中）

サル上ハ船路モ危キホトニ専ハラ用心セヨトソ（三體詩法抄三ノ二）

のやうな形が見え、江戸時代には、

こちとは樂はせずといゝから（浮世風呂二ノ下）

それでも安いから嫌だ（膝栗毛四ノ下）

のやうな形が多くなつて、今日の習慣の前蹤を成してゐる。

「ぞ」「なむ」「や」「か」に對して連體形で結ふ習慣は、室町時代に連體終止同形になつたから廢れてしまつたが、「こそ」に對して已然形で結ぶ形は尙殘つてゐる。

文章コソ面白ケレト思フタソ（蒙求抄四）

今更物を思はせうずることこそ悲しけれ（天草本平家）

それでも、

生テ用ガ、アツテコソ願イテハナイト也（蒙求抄七）

おのれを伴にして、急いで上れと書いた事こそ恨めしい（天草本平家）

の如きものもあるのは、次の時代に全く失はれる前提で、江戸時代にはもうない。

註

（一）湯澤幸吉郎氏「室町時代の言語研究」所引。